

橘高薰風川柳句集

沖積舎

橘高薰風川柳句集

沖積舎



著者近影

橘高薰風川柳句集

序

視野無限
この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

麻生路郎 識

装釘 * 伊丹啓子

目次

序 麻生路郎

7

乱れ髪

11

有情

59

檸檬

123

肉眼

155

愛染

217

花径

297

あとがき 橘高薫風

350

乱
れ
髪

乱れ髪式部の世より恋は憂き

乱れ髪恋の甘さは遠い過去

カナリヤもいてアパートの新世帯

病める子に母は茶断ちの思いやり

苦勞人孫には甘い爺であり

肋骨のふくらむ程の若い夢

菜っ葉服着て春泥をためらわず

地震にも煙草を吸うて居った父

悲しさに酔う幕切れの紙の雪

宮様も昔崩さぬ鬚を持ち

牛の背で笛吹く恋がしてみたし

言い当ててさびしいものに人の齡

陽は高し青鞥もよし花もよし

そのうちに影におびえることだろう

鏡には美形水には魔女の性

翼やや異なる北帰行南帰行

わが家にもロンドンからの客がくる

ライバルが面を外して飲んでいる

賽の目にわたしもお島千太郎

一瞬と言うは賽振る今の今

紙コップいまだに伏せたことがない

隊長は依怙地に横に並ばせる

考える人考える雨宿り

恋遠し海は木霊を返さない

カンガルーの袋はテレビ見るによし

病み上がりうどんの鉢の重すぎる

将棋指す父遊んでる顔でなし

オリオンに見下ろされてる初詣

両親の期待通りは背丈だけ

明日落ちる木の実同士のさんざめき

機関車に貴婦人ありき恋をせり

機関士が機関車降りるときの顔

ほほ笑んでいる紀子さんの鼻の汗

敗けて勝つことも大切共白髪

台風にこけしの棚はしずかなり

金よりも銀　ゴーイングマイウェイ

夫用妻用とありカレンダー

うどん好き そば好き譲ろうとしない

プリンスの恋 美しく父子二代

水鳥へ鶴のつがいは身じろがず

ひいばあさまからの指輪と譲られる

晴着着て出たがやっぱり立話

風さんがやさしい雲の親子連れ

見舞客土筆を摘んで来てくれる

蛙の降らす雨やら 龍の降らす雨

雨垂れへ 錦を飾ること誓う

口癖に言っていたことが遺書となり

若社長頭が切れて肚がない

ひまわりのリズムコスモスのリズム

梅田から来て新宿の混み具合

配られて毛生え薬の試供品

大穴は十三日の金曜日

ふんぎりの一番おそいお金持ち

普茶料理 子供はじっとしていない

花一杯友いっばいでさびしい日

達人の笛名人が聞いている

中華料理のテーブル前にした器量

喝采に代えて頷くばかりなり

味方とも敵ともつかぬ墓

初恋は蛇を怖れたころのこと

わが影のくの字に折れて長い堀

頑徹な鯛の頭の骨を見よ

またの世に散るのは紫のさくら

今の世も皿を数えるのは女

ふる里に四季霧まとう大樹あり

僕だけの凱旋門はいつも持ち

門一つ昨日の夢と明日の夢

どんと来い太鼓はいつもそう響く

老夫婦布団の新らをわびしがる

許す方許される方水を呑み

灰皿もその小心にあきれ果て

書斎から春夏秋冬 池が見え

ペン持った父へ無言でお茶を置く

初釜の席では笑いようがある

姉の紅黙って借りて魔女になる

五七五阿修羅韋駄天君と僕

癖のある字は面構え持っている

アルバムに明治の笑う顔がない

赤トンボ悲運の人を悲しませ

好きな方持って帰れと友が言う

出来なんだ頃エンピツが記憶する

扱いのこんなに違う塩砂糖

浴衣にも祇園祭りと大文字

十哲とて四天王とて師に侍る

矢も盾もたまらぬ顔は犬もする

きんつばが六つ箱には隙もない

妻と来た琵琶湖の船の今昔

ほおずきの飛び出したようプチトマト

髪染めて心もとなき日本語

乃木さんに似た人と会うひとり旅

草千里私も馬になって来る

槍穂高 借景とするログハウス

世間から見れば言うことない夫婦

傳いて笑うことなき盲導犬

軽い愛女の傘をさしている

祇園囃子だんじり囃子街の風

雲行きは夕立らしい川向こう

盆踊り河内音頭でしめくくり

午歳新春

甲斐駒も木曾駒も新春勇むらん

梅凜と咲くを受験子見て出掛け

弟んぼが大学に入り夫婦の夜

いい返事するお隣のお嫁さん

横顔のほうがよいとも言いかねる

ペンほどに重からずまた軽からず

釣り道具魚拓数枚形見分け

折り畳み傘にわたしもなりそうで

読む限り末法の世も面白し

三歳の孫消すことを知りはじめ

感心はしたものの落書を消す

その頃の羽振りがアルバムに残る

うれしさを猿は歯をむくしか出来ぬ

公民館冷房市役所は赤字

名刀無銘昔の人は名を惜しみ

読人知らず私の好きな相聞歌

一番の子の健康が案じられ

人品は卑しからぬが女好き

七夕にアルタイルベガの名もゆかし

山桜高野四郎は聶殿よ

山小屋の一軒を焼く苺の火

礼状は簡略ながら葉書なり

山の湯に鹿の化身のようなひと

酒の酌不美人でよし旅ごころ

遥かなる島従えて句碑の贅

凱旋の甲へうま酒を満たす

政治貧しく庶民の受ける巨斧の跡

出陣のねぷたで君に逢いに行く

眼鏡にも青葉映して恋たのし

竹山を聴くうつむいて顔上げて

顔見世は夫婦第九は違うひと

ワンスアポナタイムと孫について行く

将門の氣骨やいずこ天高し

今日の旅扉を閉ざしたる朱雀門

大津絵の鬼招じ入れ留守居酒

すすき見て目を濯ぎいる思いあり

騙されるにも狸型狐型

向日葵も国衰えて花小さし

馬で来る妹スポーツカーの姉

繭玉の赤と白とのごとくなり

長年の欲一本の皺となる

こぼしこぼしよばれる古いカステーラ

紫陽花の最後の色に梅雨が明け

仏壇に桃がはにかむ宣介忌

頑なな父の枕の固いこと

母がくる予感やっぱり母がくる

鴟尾放光天平の金昭和の金

柿の木と蔵に西日が美しい

代議士にお願いされる阿呆らしさ

子の会話聞きながら書く候文

水割りと読書三昧僕の避暑

このなつかしきものの母の鼻の穴

故郷よ松よりありがたき雑木

中国で久方ぶりの土煙

おのずから五七五の独り言

支度部屋横綱が来て引き締まり

気まぐれと気まま夫婦でよく続き

桜が咲いたさくらが散った癌の人

強いのは大上段に構えない

亡き母のあこがれだった空を航く

飴口に黙祷したを言わぬなり

祝 木村あきら氏
童顔の一日だった叙勲の日

握手好きこの政治家の汚れた手

今日も又一手違いで妻に負け

白胡麻と黒胡麻しかと差別あり

明月や静かの海の足跡は

月を見ていると確かな死者の影

銃を執る青春にして恋ありき

ふり返る道来た道のようにでなし

一生を社用で飲んだ酒の量

体売る女魂売る男

逃げてゆく蚊の魂を感じ取り

雪女郎山二つ程裾をひき

雪霏々と降る血を吐きし朝に似て

雪の夜暮を打つ音の間遠なり

新春の灯と悪の灯へ十二月来る

出世してモーニング着る誕生日

秋よりも爽やかな日よ誕生日

誕生日朝日も花のようにあり

バーで会うだけの友なりバーで会う

友達の定期を借りて来たデート

父の恋茶飲み友達などという

巣立つ日は校長さんからお辞儀する

その恋も最初は歩くだけだった

火は揺れただけ一匹の虫が死に

生来の美貌に金が加わりぬ

顔が近づき体温計をつまみ出し

美智子妃も旅立つ顔になり給い

飯食うて来たというのへ飯を出し

嫁ぐ朝父の散歩に添うて出る

大臣の読む新聞を妻も読む

人生の終りびったりした棺

青年の眉墨染めに著し

清貧を通せば白髪透けてくる

無と書いて和尚祇園へ出かけられ

父親の徳が少うしずつ分かり

歌枕牟婁の旅よし山と海

初恋に竹馬高く高くする

絵の中の馬車にいるのは君と僕

靴履いた頃から旅は墮落せり

悪名も売ればよしとボスらしい

蠅叩き欲深い目になっている

月冴えてくる酒冴えてくる独り

叱るのに長いせりふとなりにつけり

ガラス吹くおとぎの国の顔をして

咳込んで名句を一つ逃がしたり

ポスターを女優の卵貼りにいく

五色豆の色の際立つ十二月

ものさしへ祖母の背筋はしやんとする

いつまでも力頂く師の手紙

天城峠のフライドチキン缶コーラ

怖いもの知らずで五十八になり

夢も理想も音も失いつつ老ゆる

極楽と地獄見分けぬしゃれこうべ

証明書お辞儀の数をわびしがる

古切手失恋の日も遠くなり

金に嫁せしか人形を抱く如し

七十と言う青春はネクタイに

死を願う氷の解けて行くような

田植歌田植えのどかなものならず

サラリーマンの靴靴下にある番地

親の目に先生は皆若すぎる

夏祭り過ぎて悲しい原爆忌

滝の前自転車帰る方に向け

自転車を押して恩師の影ふまず

抽斗に転がるものが一つある

抽斗の亡父の眼鏡は捨てられず

第一番大吉とあり初みくじ

裸の煙草が散らばっている父の苦悩に

お見合いに手の静脈が目立つなり

よう喋り女満腹して帰る

山頭火放哉寒い旅をせり

付き添いが戻り表の寒さ言う

うどんすき仲居というもなくなりぬ

食うものに限り天才型である

争いはない地球儀の海の青

栄枯盛衰暴力団の表札も

通り抜け昨日誘われ今日誘う

年とってペタンシップのモデルで居

睡蓮はバラの日傘が来て眠る

クーラーは適温天井裏の鼠

汝明日を憂うるなかれ終列車

月見草貨物列車は黒く長し

列車通過駅長の背と列車の背

攻撃に羊の角は程遠し

年明けたただけではのぼの天地人

自らに同情をして釣りに出た

雑種だが教えただけの芸はする

あの年の祇園囃子が雲に住む

十二月の京都の良さを知りはじめ

振り出しに戻る小さな愛を得て

転生も美しからん
悼 山内静水氏
釈静水

潮騒も晶子曼陀羅智恵子抄

雪化粧した森しかと神おわす

この甘露堂新しく仏古り

うどん好きお汁一滴残さない

今年また燕が戻る恩に似て

定年を茶碗の龍と淋しがる

山頂に立つと指揮官めいてくる

愛の巣という可憐さはすでになし

初春の姫島千船よい名なり

真っ青な日の出地下鉄サリン以後

禊せよ初春大雪の永田町

弟も鋏が持てるようになり

敗け戦一度とてなし馬上盃

鬼の子の一番好きな鬼の面

睡蓮が自分の化身だとしても

有
情

有
情

労働歌　蟻が歌えば凄かろう

学生を矢面^{やおもて}に立て　国貧し

蕎麦の花　地球滅びるなど思えず

毛皮着て貧しい心とは見えず

椅子蹴って立ったに　続くものがなし

失いしものと得しもの　この友に

風邪ひいただけで男の嵩だかし

手紙など書きたき 風邪の癒り際

病人の長い手紙も哀れなり

明け方の火事を病人知っていた

病み上り 蟬を放してやれと言ひ

病み上り 街は光に満ちあふれ

四月四日 長女章子誕生
木も草も花をつけてる誕生日

春闘の真っ只中に 子が生れ

一月十三日 二女幸誕生
冬晴れて 見馴れし山も高く見え

子の潔癖 母の枕を父にさせず

暖い書齋 麻疹の子にとられ

三輪車 ポストへはまだ背が足らず

都会の夜 セロリは母の香に似たり

一匹の蚊に 母入院 病室の広いこと

かかる時 母再び入院 海の晦さを持つ蚊帳よ

喪服着た妻に女が残こつてた

つとさした夫の傘の大きささよ

妻の留守 食パン真っ直ぐに切れず

熱の子へ 眼鏡をかけたまま眠り

父親が優しくなった左り前

逆境にいて風呂好きの父を持ち

この頃の屎の細さよ 落ちぶれぬ

四面楚歌 故郷は豆の花の頃

麦の穂が目を刺しそうな都落ち

勤勉の額もろともに家を売り

寂として墓石 蜻蛉も動かない

わが妻になすべかりしを 賀状書く

遠い灯は 人を想えというごとし

本心が二伸に 女心かも

原始から 女の姿水を汲み

女なるかなや　この女優も芸者が似合い

剃りあとの青さが非力とも見えず

湯槽出る男　海より出るごとし

落選の酒は問答無用なり

昼の月　お前も二日酔なのか

おしなべて　銀も鉛も卒業す

天才の根気の無さが哀れなり

親切な官吏なかなか出世せず

旨いとも言わず 新聞ばかり読み

女中へは かけがえのない皿と言う

降って来たから止めようという齢になり

親捨てた仲とも見えぬ老夫婦

六十を越した家出は哀れなり

老醜の 土筆ほどにはなけれども

竹植えて 雨うつ音を楽しめり

文机に菜根譚を伏せて 留守

煙草のけむりも窓から出て行けり 春

旅に出たし 子に画く絵にも汽車電車

地図と一緒に夢を畳めり

砂丘有情 鳥取砂丘 お前と月の出を待とう

旅人も 月も やがては去る砂丘

三文オペラ 句集「三文オペラ」の岩井三窓君結婚 二句 第二幕へとかかりたり

皆 君のもの 新妻の寝顔まで

淀川の土筆送らんすべもなし 武部香林氏夫妻を想う

飯を食うさえも勇氣の要る日なり

恩借に 父の容態ねぎらわれ

この人も 金を持たせば愚かなり

蛇行して 蛇行して 川淋しけれ

万歳万歳 淋しさの残りける

檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし

雪皚々 湖一つ埋め残し

十二月 宝石の美の極まれり

有 情

紫の椅子

惜しみなく愛は奪えと　曼珠沙華

引金をひく一瞬が　恋にあり

草いきれ　万葉の世の相聞歌

恋あわれ　男が花の水を替え

新劇の台詞めいたるプロポーズ

これも　おやすみなさいで終つてゐる恋文

病人の恋は手紙の嵩を見せ

日記帳 K子K子が続いてる

もう俺をのけものにして逢うている

モーニング着た日も顔を見せにくる

性欲と恋をごっちゃにして話し

失恋が室戸の波を見に行けり

首卷をして晩年を汚す恋

気が付けば 恋のかけらを拾うてた

履きかえの足袋だけ持って 女旅

花の香を嗅ぐ顔をして接吻し

大金を持って見たとき 女かな

晴天の霹靂 乳房黒くなり

逃げおおせるものと 女は思つて居

男の嘘 女の嘘にしてやられ

一口もきかずに化粧出来上り

鏡台の前の思案はたかが知れ

出来心 ダイヤの指輪していても

末っ娘も もう声上げず泣く齡に

泊る気になって外したイヤリング

パトロンが替わり 香水が替わり

蛇が皮を脱ぐようにまた離婚した

慰謝料に 感傷はもう交ってず

静かなる嫉妬 坐ったままで待ち

未亡人 どの親切も淋しうて

子供等にママと呼ばせる後妻が来

継母の思い出に 針 つきまとい

オールドミス 娼婦のような手紙書く

高島田 猫背のくせが出てしまい

美人とはいいな 眼鏡に個性が出

姑がまた我をとおす釘の位置

ぼんぼんの嫁は標準語を使い

母に似てこの娘も百貨店が好き

菊の露ふくんで母の針仕事

あたたかし 孟母のような母ならで

妻がもう口あけて寝るようになり

毛皮着た妻になじめぬものが出来

妻の日記　もう子供等のことばかり

妻若し　産衣すら縫うことをせず

妻若し　水道一つばいにひねり

猫がもう膝にのつてゐる　女客

ざあますに妻もなつてゐる　女客

灯がついてからは落ち着く女客

毒舌に負けてはおらぬ流行つ妓

暴君のところが好きと 妓惚れ

元日を旧い家風が落ち着かせ

遠景に颯あり 松の内 のどか

銭湯の開くのを待つも 松の内

水道の洩れたままなり お正月

浮世絵の白い肌にも 春と秋

素人の浄瑠璃 土の匂いがし

菜の花を視野に 交番 眠くなり

牡丹へは 蜂も静かな訪問者

種蒔きへ 夕日安心して沈み

小便小僧に 五月の風のすばらしさ

浴衣着た人に紫陽花似て涼し

今日あたり風鈴吊らん陶泓忌

釈迦牟尼も 真夏の肌にましませり

島一つ買うて暮らせば 涼しかろ

キリストの肋に似たる昼寝をし

商いのラムネ一本抜く暑さ

夏料理 緋鯉の見える縁に座し

菊大輪 日本も支那も古い国

菊大輪 雲湧き上るごとくなり

菊花展 白菊黄菊暮れ残る

菊人形 小楠公は赤い菊

野菊咲く島で流人として終り

菊の香に 二十一世紀が近し

牛小屋に月光 美しき浪費

十二月 カナリヤの餌をまた忘れ

十二月 子供ばかりで飯を食べ

お隣も炭を割ってる大晦日

子供とはたった一と切れ食べ残し

幼稚園　もうグループというがあり

夕立のように泣き止む男の子

好きな娘に花火持たせて男の子

男の子　臍まで濡らし戻って来

いい返事してブランコを飛降りる

叱られて　ブランコで　空蹴っている

叱られた子の部屋にまだ灯が点かず

合格の朝　お隣の前も掃き

新学期　少しがたつく椅子もあり

遠足の帰りはみんな無口なり

先生に床屋の順をゆずるなり

通信簿　父が真顔になってくる

実力でした合格と子は思い

小遣いが切れるとうちにいる息子

血を分けたわが子にしては覇気がなし

夜の茶漬　パパは象牙の箸鳴らし

地震にも煙草を喫うておった父

父親になっても膝を抱く癖が

欲のない父を家中して案じ

父の手の太さは手品にはむかず

ベッドから落ちたを父はひたかくし

氷割る手つきぶざまな男親

父と来て ずっと風呂敷持たされる

父親の財布の中味嘗て見ず

春らしいものに紋白蝶の紋

獲物の大きさに 蟻 うろたえる

行き先はアルサロだったとは 蛍

家中の一番涼しいところに 猫

不器用な猫だ また骨立てている

使用人と主人の区別 猫も知り

やはり雑犬 道草ばかり食い

水際にシェパードがいて黄昏る

立話 長うて犬も坐り換え

余生送るように 水族館の鯛

籠の鳥 とらわれの身の顔してず

七面鳥 その風格が聖者めき

行きかえり 牛はおんなじ歩巾なり

象の小屋 鎖ひきずる音ばかり

似は似ても 狼の影 犬の影

逃げるための脚を氈鹿さずけられ

紫の椅子の愁いはわが愁い

有情

往
還

青春は 旗翻えるごとくなり

湖の孤独は 雲を映すのみ

一線を自分で引いて 淋しがり

宰相の私生児として生れ落ち

俗中の俗 ライターを和尚持ち

クラブ振る作家となりぬ この人も

パチンコの玉にも愚弄されて去に

複雑な世相とオモチャ屋も思い

病院の風呂から藤の棚が見え

病室に林檎 健康色過ぎる

重症へ 冬の苺が届けられ

肺病が癒った時に寿命が来

僕の齡　啄木はもう死んでいた

手術台　思想も恋も捨ててのり

酒徒あまた　李白の氣概すでになし

酒の手のあがりしのに四十過ぐ

裏切った方も酒量が増えてくる

本心を明かした酒がまだ醒めず

稲門の出と　アル中は別のこと

居酒屋の楽書帖に詩人の名

飲み仲間　誰が誘うたわけでなし

二次会の　ここも早稲田の歌になり

炬燵から片手だけ出し　飲んでいる

鶯の啼く庭に来た執達吏

執達吏　オーバー帰るまで脱がず

某月某日　税吏のメモの怖しさ

税務署へすかたん言うて押し通し

ここでまた　税吏　女将にとぼけられ

正直へ税吏が助言してくれる

追い討をかけるは　金のことらしい

でぼちんを叩いて金を借りて去に

金貯める主義には少し若過ぎる

税金を甘く見ている人に会い

埃っぽい男 あれあれ 立候補

名を挙げてからは ちよくちよく帰郷する

知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり

力士 いま 自分の汗の上に這い

真人間だったばかりに 死を選び

逆臣といわれし人と同じ紋

前身を知る朋輩を寄せつけず

近道を本人だけがしたつもり

つつ立ったまままで物言う弟子になり

道遠し 師弟二人つきりとなり

施設の子 盛り切り飯のほか知らず

参観日 この秀才の親が来ず

鶏も飼うてる島の測候所

この島も 情話を抱いて寝しずまり

故郷を出た日もこんな雲が浮き

その頃の市電 乗換券があり

新聞小説 仲居が先に目を通し

仏様へ 青いバナナを供えとき

別荘は犬小屋だけが焼け残り

ステッキの先でくらは突つかれる

松毬を拾うて楽し 山の爛

帶きゆつと鳴るも嬉しい見合の日

煎餅を割って食べるも見合の日

何もせぬのがヨット部に籍を置き

やせつぼち あんな度胸も持ちあわせ

バンガローから朝刊を読みにくる

白樺を削っただけの遭難碑

強引な碁をうつ聲をよしとする

使い込み 女に甘い人だった

神前で傲然といふベレー帽

用心棒 国の訛がまだとれず

傘さしてやうてゐる方が刑事なり

その次の船で刑事も島へ着き

ポケットに隠し切れない 手錠にて

夜の汽車 空気枕を譲り合う

鯛買ったことが長屋に知れ渡り

横丁の夕日の中の紙芝居

弁当の大きい順に朝を出る

更生の 一日 二日 雨が降り

別居して以来　物質主義となり

鳶の輪の下は一面　水害地

淋しさは　義肢に靴下履かせて出

筆勢が良うて無心の字に向かず

ベレー帽着て看板屋夢を持ち

セーヌ河畔の貸間で今日の画家となり

現職の間は小さい家に住み

日本へ少し落目のジャズバンド

ゲイバーのナンバーワンは高商出

氷屋の子を預った水都祭

図書館も市庁も古びた水都祭

瓦斯タンクの傍で結構人が住み

煙突の高さも高し　此花区

火気厳禁　寒々として城があり

猫の眼にさえ　暇人とうつるならん

梅の書齋　漱石全集揃えられ

フランス語講座　女優の書架にあり

磊落に笑うて　不安かくしとく

東京で 遺産が二年とはもたず

東京へ 出たら出たらと 若社長

社のホープ オールバックがよく似合い

新生の吸殻もあり 清交社

先代に笑うた写真などはなし

火に熔けぬものなし 五島慶太の計

ことりともさせぬ数学教授室

三味線も弾ける大学教授なり

学問の灯は落ち着けり 師走にも

猫の首つかみ二階を降りてくる

作業衣に折尺さして隙がなし

級長の欠伸に教師気がとがり

自衛隊の制服を着て養子来る

夏祭 男に似合う豆絞り

一人旅 町の祭に行き合わせ

牧場の柵に もたれている旅情

木の柵が森に続いている牧場

遠泳の 雲まで泳ぐ意気を見せ

海女の墓　日は海に出て　海に没る

囲炉裏での話　来し方ばかりなり

独り身に　魚の骨はさびしすぎ

いい眉に床屋剃刀当てずおく

散髪をして　寿司を食う　地下があり

みんな髭剃ってる　港近くなり

恐妻家　どこか張子の虎に似る

四人目の出来るを　晩酌聞かされる

母親を呼んでいる子へ　祖母が来る

乳飲ます顔は尊し　猫さえも

子が泣いて――縫目だんだん粗うなり

ボス　今日は　子の親として並ばされ

男らしい足に踏まれた 霜柱

手を汚さない生活が ふとさびし

説法を終えた教祖の菊いじり

呼鈴を 大言海の上に載せ

テロリスト 神明に加護祈るなり

聖夜の餐 莊嚴ミサ 神父の靴は常のまま

クリスマス トマトの赤も異宗めく

莊嚴ミサ 嬰兒祈らず 神に近し

孝行の仕方 兄弟みな違い

人の世や 棺に打ち込む釘もあり

靈柩車 辻を曲ってから 速し

棺の出たあとの夕焼 見事なり

香煙縷々

いのち惜しめというごとし

檸^れ

も

檬^ん

人生譜柳は日々の風を見す

春孤独眼鏡はずせばなお孤独

春風の帷に吹くごとき懸想かな

春惜しみおりひと言で事が足り

地の果ての如山頂を引き返す

金柑は皮を食わるる四月馬鹿

苑の鶯鳥のよちよち歩き卒園す

入学へ畳を歩く新らの靴

妻よ子よ水の深さが臍を越す

魚屋の魚いろいろ妻が病み

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

草餅へ墓を並ぶる死後の縁

掃苔の母の目まいが娘にうつり

墓の前刻去るままに去らしむる

立ったまま眠るペンギン迷亭忌

獰猛な熊が歩けり内股で

元旦やわけて四十という齡は

除夜過ぎて机上湧きくる泉あり

木の実彫りおりと見てあれば鶉

おとがいへマスクをずらす赤電話

灯を消せば彌勒女菩薩毛糸編む

一茶忌の赤林檎より青林檎

栄光の日も一日は二十四時

出産日父看護婦へ少し媚び

虹消えぬ嬰兒の笑みに似たりけり

みぞおち匂う人妻の恋

恋人の膝は檸檬のまるさかな

わが子男子旭のごときまる裸

長男充誕生 二句

産声のはっしはっしと聞えける

男の子欲しわが為し得ざること多ければ

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

吉本善風君結婚

千万の睫の中の睫かな

本城弦月君結婚

新妻を何と呼ぼうぞ秋の天

ヘッセ詩集の活字整然鱗雲

銀杏散る風の祭りを見るごとし

潮岬 二句

灯台の在り風浪の中なる繭

灯台は見返る時に惜別す

串本海岸

ボディービル橋杭岩の力みよう

熊野権現 二句

神澄めり烏の羽音さえひびき

山蒼し幻の中金鷄飛ぶ

鬼灯よわが七才に恋ありき

河相す、む氏還暦

還暦の人若々し五輪の年

浜田久米雄氏勇退

いざ孫と麦藁帽に親しまん

阿波踊 二句

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

われもひとも千手観音阿波踊

十郎兵衛屋敷 二句

十郎兵衛屋敷悲しや秋に満ち

おのずからさびしき旅信書きいたり

鳴門公園

遠めがね海の渦見てのどかなり

生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん

別離

曼珠沙華君といるごとくひとりおり

鯉のぼり氏素姓なき爽やかさ

制帽の汗を先ず拭き顔を拭く

片肌になり双肌を脱ぐ太鼓

韓人の服に最も風薫る

恋なれやわれに鬣あるごとし

恋なれや汝れに羽交のあるごとし

水都祭初恋の人年とらず

初恋のうすみずいろとなりにけり

膝に手を置いて井上八千代かな

金貸しに蛙のごとく手をつかえ

糸切れた琴はある夜の女に似

入試の子と母起きている看病のごと

土に字を書き残し入る試験場

母の手をひいて砂丘の狐雨

鳥取砂丘 一句

山陰に埋み火のごと三朝あり

東郷湖夕日とところを得て沈む

阿古屋貝売る鋪いつも朝焼けぬ

句集「新子」出版を祝し 時実新子さんへ
赤星の誠心誠意赤き星

窪田久美子さんへ
淡雪のいつから君を知りそめし

美しい炭火恋しき鳴雪忌

煮凍りよ少年の日は貧しかりき

別府温泉郷遠望
風神のたむろしている風袋

一望の芒に女一人かな

十文字原 二句

芒原に実るものなし月一顆

日名子旅館

妻の乳房ゆらゆら温泉の広さ

むらさき丸

子の育ちぶりよキャビンのベッドにて

元旦も蜘蛛は姿を変えられず

十二月子のやわらかき蹠

十二月三十一日も傍観者

旅ごころ旅の前夜を慎むも

君おもう熱もまじれる風邪の熱

紹刺する余生を埋めゆくような

一枚になれば銀杏の葉の形

羽根ペンで書きし嘗ての文学よ

城のある町への旅は恋に似る

日向ぼこ梅干の種口にあり

人生薄暮空より降りし奴風の顔

悪銭を分かち淋しさを分かち

パチンコ屋大人は大志抱かざる

遠き人を北斗の杓で掬わんか

めし時の時計の針の親しさよ

結婚坂根寛哉君結婚をしてハートのジャックたり

旅に出て雀の声も新しや

飼猫へやさしき言葉旅帰り

思案まつまり雨垂れが落つ

ままごとでいわしさんまはわびしいぞ

蝶の妍極まればわが誕生日

稲妻に南紀州となり白浜にけり

あぶら足安サラーを象徴し

鷺の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や

進む時計遅れる時計夫婦かな

因襲は亀の甲羅の重たさだ

月光に眠れぬ新しい墓石

禽檻にいる殊に寂しき海の鳥

大きな滝になろうと思う父の日に

惜春の音の一つに昼の三味

子が病んで鑑のごとしわが妻は

おたやんは大阪弁で喋りそう

初鏡オールドミスでありけるよ

寝正月ガス中毒をしてへんか

実印に苦悶の情が見えてきた

ビリの顔もトップの顔も苦しそう

誘拐をされこどもの日母の日過ぐ

囀るは人の飼う鳥武蔵野よ

サンガラス男の隠れ蓑ならず

忍従の女心に光る貝

角屋青貝の間

豪雪の今年つくらぬ雪だるま

北陸豪雪 五句

雪を搔くもはや旅人にはあらず

積雪一丈その下の金魚の朱

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

美しいものに雪置く美しさ

元日の駅前広場広場となる

元日や王城の内写される

行灯の灯は恩愛を思わしむ

つり合わぬ恋にかじかむ女の手

火の消えた炬燵の上の置手紙

六法全書の重さと聖書の重さ

将軍に枕して寝る世が久し

家へ帰れば襦袢も替える男だが

十二月某日ブランコ揺りいたり

男待つ灯に春夏秋冬

娼婦死し十字架にまた星戴く

独楽二つ回りいることは息苦し

青春のわが思い出に一神父

愛読書青春以来ツルゲーネフ

寺と萩マンネリズムも美しや

秋空に遠い景色を思い出し

美しい貝殻に似た若き寡婦

松茸をこけしのように掌にのせる

そろばんの玉債権者目白押し

ラッシュアワーちりめん雑魚に相似たり

水枕干す秋の氣が一入に

富士小さし生みの親をば思い出す

おとといと昨日と今日の虫の声

弱肉強食鰐皮の鞆持ち

特急は颯爽鳶の輪を残し

東北行 七句

礼を尽くし礼を失し師と旅にあり

七月の奢りを極む水の精

十和田湖 三句

水の精覚め森の精まだ眠し

踵かえさん魂青に溶けぬうち

酸ヶ湯温泉

混浴のさながら古き風俗画

工藤甲吉氏へ

半白のオールバックに知情意が

蛇行して蛇行して川淋しけれ

老夫婦喜びごとに疎くなり

父恋しわれも経読み鳥として

極月やわが父の死を立話

鳥籠に雀飼うべき鳥ならず

百合も薔薇も花輪になれば俗っぽし

勲章の欲しい七才七十才

水中花水に疲れしごとく病む

銀漢へわれも不眠の病持つ

病みて長し仏像のごと拭かれおり

日向ほこ病衣は檻樓になり易し

波の音雨粒一つ顔に落ち

お使用の継母こわし道こわし

魔の山と見えず初日の下にある

青雲のところに蜜柑まだ青く

春愁の階段ゆるく螺をなせり

風花の今日タイガースキャンプイン
クリスマスカードの雪はしずかなり

肉

眼

恩師の死 その夜眠しとも眠し

恩師の死 手に止まる蚊をただ見つめ

恩師の死 蟬殻の背は断ち割られ

恩師の死 油然と聞く浪花節

老詩人 ひとり渉らす天の川

褒められた思い出がなし師を葬送る

炎天に寒疣立てて師を葬送る

初盆の胡瓜の馬は師に似たり

濡はるか 近づきしだけ遠のく師

氷柱に侍す 正装のバーテンダー

大嘘をついて大きな笑い声

屈辱の紋章 女史に坐りだこ

ルンペンに王侯の鬚 詩人の眼

嫣然と舞妓酔うても襟かたし

コスモスのほったらかしの美しさ

ボーリング 恋のライバル鑒

断崖絶壁 断崖絶壁 冬の恋

滝氷る 信ずべからぬささめごと

長靴の片方どうしてもこける

歩き初めの子を元旦の地へおろす

元旦や 齒の美しいお嬢さん

福寿草 父子兄弟に似たりけり

一人去り一人去る 聖堂にして

子の頭蛭のごとし 可愛ゆし 黒し

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

鼻先をつんつん歩く好きな人

富士見えていよいよ華麗 食堂車

草の芽が出たぞ おしっこさせながら

子を抱けば必ず花と向い合い

大國主命の国の春の雲

嘘をつく人間ばかり　しゃれこうべ

消防車　火よりも赤く胴ぶるい

波のしぶき逃れて小雨降っている

大吠崎 二句

灯台は灯の入る瞬時羞らいぬ

おしゃれな子のてるてる坊主までおしゃれ

水郷の微風から雨に移る候

水郷 五句

水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし

柳 ポプラ 柳 ポプラ 水郷よ

水郷の胸の高さに続く水

音のみの世界またよし 水の上

天国に節穴一つ 豆秋忌

路郎忌に炸裂したるカンナの朱

蓮の花は一茎一花 恩師の忌

路郎忌や むかし僧俊寛の霊

路郎忌のビールの泡はあふれしめ

路郎忌に言葉を飾る人ばかり

鐘の音 さらに身のおきどころなし

恩師の忌 血脈豊かなる蓮花

かんと鳴るもののあるなり 恩師の忌

石の階 童話を讀むにうってつけ

秋風の天神さまの細道じゃ

横向きの女ばかりへ秋の風

金ペンにふさわしき秋灯となる

絲瓜のあおほどの青なし 祖父の愛

栄光のマントの裏は血の色だ

兎の目ほどのしずかな恋ごころ

学問の跡形もなし 小商人

人情の 秋深まればよみがえり

啞三味氏三周忌

紫綬やよし 詩人の胸をいろどるに

川上三太郎先生へ

明治百年 蹄の音は消え去りぬ

赤帽もそのうちみんな齡をとり

十二月 あしかの声につまさるる

中之島剣先は寂 十二月

元日の恋に使いし一時間

オーバーの襟立てさらに破魔矢立て

何もかもぬかるむ戦後 明治村

ベトナム遠し 子のピストルに斃れる真似

建国祭 寒の卵に血がまじり

飯盛山 遺恨の如く雪残る

一人旅 わかさぎ釣りの氷穴親し

黝々と水かけ不動 恋の垢

処女の死 鏡の中へ歩み去る

おたまじゃくしのままでありたし少女の恋

人を待つ かたわらの花嗅ぎもして

一日の重さ軽さよ 日記帖

風薫る キューピーほどの裸はなし

風薫る 歩きながらのハーモニカ

歌うより踊るよりない平和かね

テレビ見る　子を頤と膝に埋め

金環蝕　そらエンゲージリングだよ

舟歌は最も人を恋う歌か

捨猫とうなだれがちの向日葵と

童顔は首から上だけのことさ

同期の桜　酒に爛れてしまいきり

四五人が来て瞬時句碑華やげり

句碑ありぬ 亡き先生の背丈程の

夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん

母と来てお伽話の花の色

乗鞍 二句

雲海に槍 胸中に人尖る

噴水の形変らず恋終る

明治村 醉生夢死の昼の月

明治村 烈婦というはすでになし

犬と住む都会の底の夜の底

霧のダム 信濃の旅 五句 紺の背広の竜神か

黄色い屋根の旅館に寝たり 秋の信濃の

幻の女の息の霧の音

霧の奥　熱が出そうな林檎の実

火口湖から　わが眼鏡から　霧生まる

初冬の恋　鶴の面着て立ち向かう

十年経て女の言葉あわれなり

汝が祈りふかからしむと雪を給う

お元日　わが家の波夷羅大将も

元日の冬濤を率て逢いにくる

青年の歌なまぬるきお元日

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

一枚めぐり一枚めぐり 波と恋

安西峰代さん結婚

およめさん金米糖を食べ 愛に満ち満ちてありぬ

石くれも三つ積んだら思惟の塔

攻める扉逃げる扉を持つあいつ

友来たる 古きレコード回すべし

山男 山を下りてはみすばらし

牡蠣殻におのずからなる波の縞

冬の雷 石仏七千俯瞰の中

乳母車 いのち育てしものなつかし

土の中　土の埴輪が埋められ

墓があり　急に土あたたかくなる

滝の白　雨は斜めに降りかわり

灯籠三千　春日大社万灯籠 三句 祈願三千　尽くや神

静かな灯三千集ってしずかなり

大いなる硝子の如き寒気あり

火の粉降るお水取り 二句 闇 豊頬の奈良乙女

走る火の行きつくところ屋根の反り

恋を待つ人座り椅子充実す

真心をあげて淋しくなりました

待つ人が来て愛犬を放ちやる

税務署出て万の毛穴を押しひろげ

春愁の 無より淋しき無限大

笛吹き童子 恋ならなくに ならなくに

仏像を恋うるがごとき恋となり

ホームバー 子なき夫婦が赤を着て

秋吉台 石の饒舌 雲の黙

朱の鳥居 愛恋道の入口か

寂まくと 伎芸天女に指紋なし

師はあらず 尾道にて 五句 文学小径埒もなや

尾道や 今見下ろせし船に乗る

五月の雨 尾道生駒似たるあり

師を胸に置く 船と船すれ違い

盲目の亜鈍氏が笑む 師を話し

耕耘機　色異なれど音同じ

掃苔の隣の墓に帽をのせ

てんとう虫　能登から佐渡へ　八句
ここにも小さい輪島塗

銭湯に隣す　輪島映画館

鬼あざみ　能登曇りてふ曇りあり

海渡る　たかが佐渡とは言う勿れ

花の墓 大佐渡小佐渡並走す

忘恩や 磯の香のせぬ日本海

男あり すっぱり痩せておけさ節

青佐渡を墓と思ひしは只今なり

佐渡を去る

暮れ切らぬ花火 心があとさきで

夜の波にふたりの心縫わせおり

霧の夜の松の林に死後の景

睡蓮に汗くさき身を遠ざける

漆黒のピアノから出る海の音

猫抱いてあれば乙女子耳聴く

秋風に傷なきものはなかりけり

眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり

草臥れがどっと仁王の大わらじ

スケートを履くと獣の姿勢とる

枢出た跡形もなし 療養所

嗚呼 清原祐志君 三句

耳濡らす涙 生涯仰臥の身

君の骨 栗拾うごと拾われよ

淀川の水滔々とお元日

冬夜の凍て 愛恋の書も真理の書も

牡丹雪 ゆっくり俺が昇天す

読みつげば 冬の未明の白湯の味

白黒記

君あらず 浅虫の日は見えながら

悼 工藤安亭氏

海の風 竜馬の鬢へ ふところへ

桂 浜

紅椿墜とすや怒濤はばたけり

足摺岬

讃岐富士 一番星を簪に

夕桜 盲人鳩の餌をこぼす

夕桜 琴朱の布に包まれる

吐く息も吸う息もなし 夕桜

恋の句を刻まれし碑の濃陽炎

旅先の動物園のフラミンゴ

潮干狩 竿突つ立てて帽子掛

猫柳 亡き人ばかり思わるる

四つ足を連れた足跡 大砂丘

鳥取砂丘 三句

子と来れば砂丘隅まで砂の山

三人の子と玄奘のごと行く砂丘

物言わぬ金魚がうれし 誕生日

傷ついた父　その日から髭をおく

原爆忌　鳩ら火傷の脚運ぶ

ここに広島来て胎児のごとき祈りあり

曼珠沙華　恋わるるよりも恋うべしと

人の世や　嗚呼にはじまる広辞苑

菊花展　天守へやさし菊の塀

菊の壺 薔薇の壺より物思う

青年長髪 ピストル型のドライヤー

老猿の半跏思惟像すぐ崩れ

陸橋は天下の嶮よ 梯子酒

点滴の血のみ暖色 妻病む 十句 手術室

手術なお神の議りに似し医師ら

手術なお交響樂が鳴りつづけ

紅薔薇は壺に剩れど血の足らぬ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

病院の丑満刻を尿捨てに

お見舞の三品四品は小包で

病院の金魚寡多なく退院す

縫針を折ってしまえり男親

クリスマス 祈れるものは祈りおり

消防車 前方睨む人ばかり

釣針を整う如し 旅前夜

元旦や 偈頌のごとくに師の一句

読み初めの今年は石田波郷集

夜の長さ 襖をあける猫がいて

妻に病まれ 妻再び入院す 四句 壺中をのぞく 日に幾度

病妻は少女のようなくくり髪

袋ごと蜜柑食う子よ 母が病み

手にのせた文鳥の暖 母が病む

恋の景 丸木橋から鉄橋へ

悼 後藤梅志氏 二句

正しき死 その夜莊嚴 山焼かれ

横縞の雪となりたり 霊柩車

一隅と云うは安けし猫などいて

噴水と相似の緑 柳なり

雪国の桜でありし桜漬け

万博ソ連館

チエホフの卵を生みそうな眼鏡

句碑激し竜飛岬 二句 浪ここに果て風ここよりす

竜飛岬 地に這う蟻も疾風の圈

婚を約し 月へ帰れぬかぐや姫
藤巻昌子さんへ

光堂 大阪地獄から来しに

梅雨荒し 許せぬもののある如く

焼ける胃と如何なし難し 想夫恋

ワンマンも胃のたかぶりを持て余す

枕抱いて 胃をかばえるか虫を聞くか

斜に見て天のひとでの大文字

大文字 額の焼ける火なりけり

大文字 酔醒めるよりはかなしや

大文字 夢の多くは夢で終る

松島のふた月たちてなつかしや

入院や 入院手術 十句
わが来し方の土埃

天井が未来へ移行 担送車

麻醉より醒めて必ず夜なりけり

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

粥を嚙む 乳児嚙むよりおそれをなし

秋の雨　しずかに粥がこなれゆく

手術後の白髪いつまで抜かざるや

胃を切除りし秋　犬抱けばあたたかに

焼跡に似た傷抱いて冬近し

胃半分　肺半分の湯呑かな

大輪のぐわらりと菊の散りざまや

嗚呼　清水白柳氏　三句

悲報来　金魚　鮒　鯉　水の底

病床に聞く訃へ水を飲んですます

ジンフィーズ　美人は美徳だと思ふ

ハラキリ由紀夫へ　雪降らず　花散らず

霜月悲唱　五句

死に行く鉢巻の尾を長垂らし

由紀夫の首といくばく距つ焼林檎

まどうなく胃を切除りわれのながらうに

終焉や 裂けてくれない増す柘榴

風花す 雪子が髪を梳くらしく

長男の頭へ手を載せやすき背丈

晩年という日のなかりける男

悼 住田乱耽氏

水仙にはあたたかすぎる風邪の部屋

長尾鶏 李白は如何に叙すならん

通り抜け 花の濃淡夜に入りぬ

陰陽石 つつじの燃える頃となる

男へもやさしい手紙書く男
中尾漢介兄へ

父の愛娘にあつし 富士桜

切手にも金魚が泳ぎ風薫る

梅雨明けの雷どんと 路郎の忌

路郎の忌 白の鉄線一花でよし

路郎の忌 形見の肉池藍あせず

路郎の忌 立膝癖も師父ゆずり

路郎の忌 句を奉り香華とす

路郎忌に 松の洩れ日のなつかしさ

路郎忌に塔の影なす酒の壇

路郎の忌 天牛に来て落着きぬ

路郎の忌 睡蓮水の旅つづけ

その人を待つ 戦傷の盲人堀江正明氏はかつて路郎忌句会に上阪を欠かせしことなければ 路郎忌も七回忌

胃を切除って夏冬ながし 誕生日

お六櫛 馬籠・妻籠にて 三句 われを籠らすひともし

櫛の齒に秋の近づきいたりけり

雨上り 猫はや歩く石畳

雲 波に 波 雲に似し はたちの日

生き死には碁石のことでないのなり

黙契や 野に紫の花が増え

裏窓は山下清画く屋根だ

木犀と星が漉すなるこの夜氣か

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

葛の花咲き 樹下美人嫁ぎしと

吉村和美さんへ

憂国忌 柿は蒂のみ残りたり

半月のごろんとありぬ 憂国忌

四つ足で歩けば楽になる傷か

切株の俺の五年と子の五年

冬の酒 蛸の足こそ親しけれ

白蝶入り 黄蝶出て来ぬ 寺の門

夫婦にはなれなかったが冬の旅

革命をめぐらすに 湯に身が浮くよ

お元日 日本人の目の黒さ

誕生の馬の額の白い星

紅椿 雪を解かしていたりけり

志操とや 嘴にある鼻の穴

手に足に関節のある寒さかな

ひとりよりふたりにこわき屏風波

黙契や いまも仏法僧が啼く

ギター抱き　ぼろんぼろんとかぼす悍

吊皮は手枷　生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

冬牡丹　九死一生かも知れず

一日に精魂尽くす痩せようだ

夜桜へ　街の時計は刻打たず

反葬は雪の巔から李花の里

水浴びの鳥を見ている人妻か

少年の幾人いても毬一つ

路郎の忌 瞋恚近づき遠ざかる

路郎の忌 酒債なければ詩債なし

七月の蜂起の空となりけり

恋人がいま肉眼に入り来る

灯竿と号し 逸見灯竿氏を祝し その灯が古稀になり

山男 板尾岳人兄へ 山の画集に汗おとす

見残した夢を見ている塔の朱よ 浄瑠璃寺 四句

塔の朱の水に映れば浄土の朱

立たせたき人 睡蓮と塔の間

残酷な声 睡蓮の眠れるに

灯台よ 牛乳壺に乳充てる

人妻よ 海中の石見えながら

大文字 恋のはじめのごとく点く

大文字 はや消えかかる第二劃

大文字 聞えぬ音と見えぬ影

堀江正朗氏還暦

心眼に六十一の秋が澄み

腸詰が繋がっている母子家庭

秋の恋 受話器の奥で時計鳴る

サボテンも蟻も乾けり 恍惚の人

水飲めば涙に変わる 恍惚の人

一生に一度の御籤 父のみくじ

人生に起承転結ありにけり

旅館廃業

父の忌に障子の部屋もなくなりぬ

昭和乱世 今太閤は痩せていず

寡婦の買う数珠のようなる首飾り

娘のボーイフレンドやよし お元旦

元旦ぞ ルバング島も元旦ぞ

ルバングの一兵の生 宮中歌会

父の乗る船の模型が応接間

裏梅は聞えぬふりをする女

霧這えば杉の樹間の正しさよ

金剛山

深眠り 母娘相似のカメオ置き

哀歎の底に穴ある植木鉢

裏切られあたたかきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

童貞さんふうわりと跳ぶ 春の泥

地下鉄に勤め持つなりメーデー歌

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

この句碑の 尼緑之助氏句碑 はじめて会うてなつかしさ

赤鼻の麝佳境に入りたり

呼び戻す 背なの赤子の名を呼んで

核のごと艱難の齒がこぼれたり

安からめ 御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し 女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

愛^{あい}

染^{ぜん}

ペディキュアの足を仏足頂礼す

遍路杖納めセールスマンの足

夢に見る父は父よりやさしかり

耳垢と耳学問をわびしがる

日の高さ悪事悪事とならぬなり

へらへらと泳ぐ魚に似た汚職

葉玉の中の鳩なり受験の子

臍の緒がまた生えてくる子の受験

端然と墓のようなる書家の墨

昼の月瓢湖に映る力なし

花つけて白鳥の首シクラメン

聞香の首かしげいる白鳥か

心經の無の字の多き金泥なり

読む限り末法の世も面白し

草花に水をやる世は渴したり

落選す百万言を費して

雲は挽歌雲は新生恩師の忌

十年の歳月が澄む竹の節

蝶がいて石に老若男女あり

朝刊の音のさらりと今日も晴

竜宮もへドロ藻泥となりぬべし

牛頭馬頭の雲は動かず原爆忌

喫する蓮花の菓子を口にして

失恋の四十九日となりけるよ

花言葉忘恩もある不死もある

隠岐行

雨意将に至らんとする摩天崖

長崎行 三句

長崎の霞はまるし湾円く

磔像へつるべ落しに夕日落つ

小便を風に散らしぬ大瀬崎

目に余るものにロビーの登山靴

清しさは秋に衰え冬に死し

西成のシャツステテコは王衣に似

三日月があんなに光るのも勇氣

トンネルが遠くに見える秋の恋

鰯雲びっしり僕の齒は抜ける

天来の妙音蔵す白百台は

晩秋に水は一番重くなる

氷囊の下から見てる好きな人

水の上蛇の長さが長くなる

十二月の粹人奇人物語

新年や男も竜も玉を抱く

花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり

裁かれるのに座布団が敷いてある

目に見えぬものを支える釈迦の指

ハワイ行GOのランプか月が出る

ハワイ紀行 五句

ハワイまで星を閲して来たりけり

われら迎うオアフは波のレイかけて

枝のない椰子を夕日がすべり落つ

就中ひよろひよろ椰子の親しさよ

偽証する伊藤大久保維新の名

児玉誉士夫の笑い袋や金袋

小佐野児玉の暗い寒山拾得図

勲一等黒き旭日大綬章

エリート
の狐が落ちた獄の顔

松本波郎夫人を悼む

おだまきが咲いてる紫の涙

鑑真和上像

おん目元さつき明りのし給える

童唄生別死別異ならず

チューリップ胡蝶の奈落かも知れず

阿難尊者に遠し恩師の忌

妹に紙の兜がよく似合う

板尾岳人兄へ

頂上に汗ひく顔の謝靈運

似てゐるなと河童は蟪蛄に見入る

仏手柑ひとつ新年の文机に

露草よ額田王が袖を振る

子の名ほど迷わず孫の名を決める

赤鬼も煩惱を持つ臍を持ち

任俠は男のロマン喉仏

ポツペンはブーツの女にも似合う

逝く春へ白だけ残る五色豆

修業とや砥の前で小半日

夢醒めて紙の音する千羽鶴

病み上りに心もとなき鰯の目

曼荼羅に原子のごとく仏たち

七月よ煙草の輪にも力あり

裏切りに思い当るは茄子のかるさ

氷柱花電話ボックスには女

きりぎりすちよんと男は立ち上る

臍放り出して社長隙がなし

母一人子一人秋の灯を分ち

志衰えて書く立志伝

月下美人王昭君が逝きまする

聖書一冊を草分けの力とし

父の苦悩に裸の煙草が散らばっている

背徳や三面鏡の無数の顔

美しい丘日本にキリストは出ぬ

敗戦忌バスケットから犬の顔

新婚のスプーンに指紋つきはじめ

一芸に秀でし顔へ初明り

初日記夢を針小棒大に

亜鈍さんを祝う

お恥かしい古稀と宿老温かし

パントマイムの妻に止めを刺されたり

演出をする齡でない齡でない

樹に添うて力をもらう風の葬

紫に男女の別のあるごとし

昔から女が走る愛の時

河豚食うて処女穢れること勿れ

水の渦想いの渦も春になり

海鳴りへ標本室の貝の耳

やがて女は友情を持てあますだろ

死顔の牧人さんを悼むなお満を持し満を持し

朝顔のファンファールの中僕は生れた

背の小さい方が姉なり桜草

路郎忌や瘦身力士勝名乗

一点鐘わたしのマリヤ歎歎く

蔓ばらと善魔の護る城ならん

寺尾俊平さん新居落成

柳暗やお染久松蔵の窓

紫陽花の炎群愛染不動かな

君にふたごころわがあらめやもモンロー忌

モンロー忌黒子の位置の恐るべし

春愁の半歳経たるかな秋思

夏の愛形を変えて鰯雲

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

城うらのまてばしいの実待つ楽しさ

おもしろさ雀は跳ねて鳩歩く

合歡の花雨に濡れてるのは乳房

恋瘦せの乳房から瘦せきしという

鯊を釣る鯊のごとくに群がりて

子と見れば月下美人は宇宙船

花嫁に牟婁の海山弥朗ら

大矢十郎氏息女栄子さんの結婚を祝し

三段峡にて 二句

恐懼せり紅葉と滝の神の前

友情に深入山の名もうれし

走馬灯靈は肉より現なり

一輪の菊は気合で咲くごとし

入学のよい目よい耳よい眉根

ネクタイのままでデカンショの輪に入り

花の宴家康ひとり目をつむり

昼の酒遠く雷鳴っている

マズルカへ拙者お相手仕る

鳩時計の鳩が覗いた悪だくみ

建仁寺垣相国寺垣マドモアゼル

飲む会のハガキは箸で裏返す

初明り秘仏開扉もかくやあらん

悪筆も墨痕淋漓年賀状

葡萄食べ終ると焼跡のような

映画ほど静かではない恋終る

虹の子を千晶とこそは名付けたれ

田中博造・峰代夫妻に女子誕生

紫の色の気合が分りかけ

ラブレター死屍るいるいとありにけり

悼 大野源一九段

閻王の前でも飛車の氣っ腑なり

つきあいで踏まれています邪鬼の顔

落椿情炎未だこちら向く

水仙よりスキーのジャンプ端正に

次女早稲田大学入学

遊学の娘の決心と花のペン

タンポポの絮に意志ありわが怯懦

その日以後語らず書かず娘を思い

苦楽園口のさくらを見に来いと

ここは土佐河伯と河童呑みくらべ

夕桜釈路郎が向うから

水子塚時に桜も蒼ざめる

忍耐も少し異なる美女醜女

口説かれてゐるに女は箸止めず

春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

昼は花を夜は花火を見たふたり

少年のように近頃夜が怖し

タンポポはタンポポという河内弁

タンポポの絮と僕との宇宙観

路郎忌のわれよき友と旅にあり

路郎忌の氷も白い炎かな

あの女ほたほた炎落し行く

敗戦日分水嶺の如くあり

敗戦日われ人生を二つ生き

ハンカチを黙って渡す妻の汗

百匹になると鰻も修羅になる

手榴弾かつて握りし掌にレモン

浴衣着て又一段と名妓たり

空腹も贅の一つよ名月よ

恩師矍鑠槍さびを口ずさみ

菊の日の白い炎に焼かれける

八百長相撲も礼にはじまり礼に終る

喃妻よ鮎まで値切ることはない

老桜のほつほつと咲く童心か

水仙が並び口開く聖歌隊

こんな恋ならと百人一首かな

養命酒汚辱のいのち養えり

淋しさは前行く犬の足の裏

この花にあのような実が四月馬鹿

黒百合を見てこの旅はこれでよし

梅雨ついてブルートレイン青深め

青森行 四句

親しさはねぶたの顔でお出迎え

恐山四人四本の死人花

恐山空焼けるとき恐山

海底の都は憂きか平家蟹

風渡る愛の伝わりゆくさまに

落武者の強さ髻切れてから

おぞましき議員の胸の赤い羽根

鉄砲玉もひょうろく玉も定年か

真相は大根になる貝割菜

家元のお供で寺の昼を食べ

道化の死蝙蝠傘は舟になり

古手紙この世のことはこのような

父親の懐ふかき風の糸

白色も一色ならず死生の裡

水は低きに友も低きに流れるか

お手植えの松枯れながら続く昭和

啓蟄の虫より先に代議士め

横揺りにあしかが歩く金脈へ

寝転んで読むを許さる卒業し

入学と卒業姉妹ピアノ弾く

春情やちまたに枝垂るもの多し

孔雀羽根ひろげくると能役者

楽しげは怨嗟の声の小鳥たち

合掌の手が焰とも見えるなり

美しき地獄牡丹の散りしける

青い葉は花よりすがし晶子の忌

落胤の身の放埒が募るなり

父と子と手をつなぎ行く盆の窪

旅人へ何と親しい駄なこと

梅雨の街碧眼灯すごとく行く

ああ五十妻が侮る子が叛く

金脈へ力無きかえる蝦骨無き蚯蚓

涼しげに老樹一蟬点したり

墮地獄のいのちもたった一つきり

かまきりの鎌振り上げて事切れし

穂芒の如き魂ありにけり

勇の川白秋の川恙無きや

横顔の子規も八雲も荒仏

われもまた己を知らずお元旦

年寄の居ぬお雑煮は淋しから

われをしも駄馬貴人と名付けんか

悼 大山あや子さん

優しい人をなおもやさしく有馬筆

禅僧の描く円に似た大根煮

ぎんなんの水平線も遥かなり

水平線今にどんでん返しある

詠は常にかかるかたちで来る白刃

嗚呼 麻生霞乃先生 三句

髭を剃る千本の樹を薙ぎ倒す

花の散る今日一日は物言うな

シクラメン伐折羅大将より激し

形見分け暖かい石冷たい石

かなしみの西より来れば西へ旅

その時の警策に似た父の文

母の顔安楽椅子の観世音

猪口を持つ手つき恩師に似て来たり

申告を散歩がてらの老教授

白秋は朱欒柳川にてのごとし陽のごとし

本棚を砦のように老作家

白菜の悲鳴が妻に聞えたか

清冽な泉を抱いて大樹かな

藤沢桓夫先生喜寿

自愛とはこの一杯よ誕生日

鶴の愚鈍亀の狂気をあこがれる

花の絵の鍋で魚が焦げている

母病むに紅白の別花に多し

砂時計突如竜巻母が死ぬ

その朝も髭を剃ることからはじめ

合歡の花母の乳房を焼いて来ぬ

朝々を羯諦羯諦と悔いつづけ

亡母の闇は鬱金の闇か夢に見たし

亡母の闇この世は雨が降っています

香の銘天菊とあり亡母の闇

白菊千日仏も飽きはしませぬか

墓の前もとの子一人母一人

赤電話髭の殿下じゃなかったか

鰭だけを動かしている河豚の顔

月天心男が出会うたのは男

人妻と濁りにしまぬにごり酒

送り火を極楽の火と子は信じ

亡母初盆

白は光りに光る綿帽子

長女章子結婚二句

紅唇もまた光りに光る綿帽子

娘が嫁ぎ炬燵で正座する父か

畏友俊平兄へ

やがて君と伯夷叔齊たるもよし

初光悪人ばらを刺し通し

梅よりも桃に魅かれる少し老い

軽い嘘種なし葡萄食べながら

軍鶏抱いて男の流転限りなし

剃髪をして紫の底知れず

余呉の湖灯ともし頃は灯がともし

白い山燦然とあり儀式の場

見返るに長すぎはせぬ鶴の首

豹を着て豹の匂いにする女

茶の間では書斎の頑固ほどでなし

揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ

落雲雀亡母の居どこは地か天か

紫は仁義礼智信を統べ

白牡丹レーダーよりも雨氣を知り

男を磨く女を磨くやや違い

城北菖蒲園

なかんずく紫式部むらさきに

眼鏡拭きほとぼりはもうさめたるか

父の日か秋にはおじいちゃんになる

亡母三周忌

亡母の闇黒い壠から酒を酌ぐ

郡上八幡

宗祇の水柳一葉と掬うなり

初孫誕生

栗の毬孫は子よりも小さきよ

初孫と握手する一本の指で

生き方を青から赤に替えるなり

僕の富レモン一個を棺に入れよ

一番に孫の箸紙書いた新春

若者の髭にうたれたためしなし

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

世の移り変りさびしい雀ずし

吊皮に横溝正史片手読み

花よりも紅葉に似合う紺のれん

のれん分け電話一番違いなり

吉野大夫高尾大夫の菊の首

英雄は花という字にこがれ死ぬ

校長が校長らしい松の内

長年の欲一本の皺となる

三代に仕えた安楽椅子という

日だまりに似て灯だまりが秋にあり

路郎忌のこれも魂金魚の朱

路郎忌の暑さと葭乃忌の寒さ

恋人の名より親しい摩周丸

函館行 三句

イカソーメン妻子を思うことなかれ

睡蓮の炸裂もよし五稜廓

サーカスに似て来た五輪大一座

夏の風邪瀬古とマラソン走るなり

本棚に隙間のあるは油断かな

大山も影大山も盆に入り

剃髪をして煩惱のひとつかみ

中国吟行 十句

謝々と栞大人長箸で

死より先ず生おそろしき玉仏寺

サルビアも思想魯迅の墓の道

上海の夜と思う夜の赤い酒

蘇州では蘇州の歩幅塔二つ

山容の変幻天地玄黄と

奇巖重疊影かと見れば影の山

水牛に雨笠煙蓑の情こころあり

秋の月餅 春風点心店にありや

妻に買う小さい翡翠の色定め

飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光

但馬牛美し百獣の王よりも

東京の娘の着くを待つ祝膳

祝膳孫の正座はままならぬ

幼な子も思いを遂げた顔はよし

番号に悲喜ある日なり風の中

観心寺

探梅に大楠公という地酒

新内は腸にしむ路郎の忌

七夕の赤い色紙へ釈路郎

毎日の中の一誕生日

鏡照り照りて花嫁はわが娘

次女幸結婚

還暦や吉祥天と初詣

還暦の若水なれば若やいで

還暦は実年の花弓始

八十になつたら恋をしてみよう

仏一体数知れぬ露の奥

風の糸妹ついぞ持たされず

稲光天壇瞬時帽の影

北京

われここに残り魑魅魍魎となれば

懸光寺 二句

歓喜天息をつくろう偽夫婦

虫が来て晩学の灯を和ませる

友だちがしみじみ光る年となり

幕切れの破顔一笑は鬼だ

馬に乗る姿を今にあらがれる

雑踏へまぎれるときの好きな人

おみくじにやがてとあつてよろず吉

かんぜより下手の一本まぎれなし

七十と三十の恋指相撲

孫ふたり初湯の桶のよい響

明けましておめでとう無言電話にも

ほんとうに死んでしまった死んだふり

サツチャーとアキノの違いほど違い

思慮深き一本それは折れた葦

白頭巾白涎掛け雪仏

大相撲昔のことは言わぬこと

還暦にはたちの青春がまだ残り

辻川慶子さん還暦

世は暗し腸鯁えた鯉のぼり

槍穂高白馬も葬送れ神妙に

義妹の死 三句

紅冴えて花嫁化粧にはあらず

別れして猫の頭を撫でるのみ

走馬灯花も犬ほど走るなり

追うことは逃げることなり走馬灯

般若湯師の槍さびが聞こえそう

高野山にて 三句

法悦にあらざるはなし仕舞風呂

宿坊の夜明け寝相も人格だ

秋田・青森の旅 四句

北限の鈴虫を聞くひとり旅

寒風山男鹿の芒は背が低し

太宰真似て頬杖をつく斜陽館

昼の月十三の砂山海晦し

桐一葉猫も座禅の向うむき

さんふらわあ号へ洋上初日の出

うたせ湯に印結ばねど結跏趺坐

つらつら椿つらつら大和郡山

川口弘生先生を偲ぶ

幟差の一人ひとりが鹿之助

鹿野城山神社祭礼

赤いベレー老いてますますフォーグイズム

高鷲亜鈍さんへ

日日恐懼昭和とともに生きてきて

屠蘇祝うわが家の龍虎おだやかに

お元日香水匂いすぎぬこと

絵双六妻も子供のときの顔

還暦の妻と易々諾々と旅

茫々五十年醜武蔵野陵 二句の御楯は呆け立つ

死にぞこない生きぞこないへ白い雨

花が散る弊衣破帽をなつかしみ

これはこれは寅さん陽気草だんご

柴又帝釈天

夏は陽画冬は陰画の佐渡の旅

この世からあの世は見えずさし向かい

栗谷春子さんのご夫君を悼む 二句

あの世からこの世は見えてさし向かい

生きているうちは明かせぬ吾亦紅

老司祭黒にも無垢の衣あり

アメリカンフットボールは麻薬かな

ヘルメット着けて一弾頭となる

青芝にQB牛若丸の生まれかわり

ぶち当たれぶち当たれ音小気味よき

ヘルメット挙げ雄叫びや勝鬨や

モナリザも拈華微笑に違いなし

湖の雨を水底から見つめ

夏空に映りそうなるたらい舟

佐渡小木にて

白黒の次の世へこそ立たれけり

高鷲亜鈍氏を悼む

さわやかやこんな小さい仏さま

嗚呼 藤沢桓夫先生

完璧な乳房に逢うた母以来

淡島幻想

羽衣を盗られたような風邪を引き

十二月妻の俠気も役立たず

揖斐長良桑名水郷やんまのつるむ河の幅

お元日老醜枯淡紙一重

風神の八坂の郷の朱の破魔矢

朱の破魔矢吉井勇の血も通い

福寿草五人家族はこのような

七夕や春信の朱と路郎の朱

うれしさは秋の実りが我が家にも

内孫みのり誕生

勾玉をじいは磨いているのだよ

さびしいよ極楽鳥が名だなんて

北国になお北のあり流水よ

あかねさす白鳥宮に初詣

初日かげわが句碑に酒まいらせん

孫膝にしておさまるは句碑の膝

この世での初めての雪見るみのり

這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔

風邪熱のみのりちゃん桃の花のよう

シーソーは問答に似る爺と孫

梅紅白義公烈公今に生き

水戸にて三句

梅熱し斃而後已

鮫鰯も汗かきならん鮫鰯鍋

四季浄土花は歌うて鳥匂う

上村松篁画伯米寿

青玲の気の魂と凝る館

直原玉青画伯米寿・玉青館落成

秋深し位牌に秋の一字あり

生きるとは写経に続き賀状書く

北の旅残るさくらを妻が褒め

葉桜の温泉は花の溶けた色

豊頬のひきめかぎばな孫娘

老いてしずけし淫の字も姦の字も

犬小屋にペンキで窓が描いてある

これが遺書「平平凡凡」四つの文字

知覧特効基地

古稀の屠蘇壺萬里酒羅生門

紅の爪枯山水の枯れること

柳の芽姉三六角蛸錦

椿咲く有為の奥山紅椿

椿咲く浅き夢見じ白椿

地にひそむ魔の天空へ駈け抜けし

阪神大震災 八句

畔形の仁王の突如叫ぶとき

閃光から光焰首なき兵馬俑

南京町

地震熄んで一輪の薔薇毅然たり

遠吠えのごとく余震のつづく夜

月赤しわれも傾く三宮

柳友の死に近寄りがたき長田町

これからも神戸に住むと卒寿の師

田辺聖子先生へ

紫綬うれしインクひとときわ匂い立ち

長男と

酌ぎ交わし而立と古稀は一瞬ぞ

千代紙にはや好きな色孫娘

大寒も明治 大正 昭和 平成

茶畠によし杉によし鯉のぼり
大井川鉄道

政治家の臍を比べてみたくなる

淀川と四万十川の生きる音
土佐にて

南無菊花義礼信を棺に入れ
哀悼 西尾葉先生 五句

足弱の師なり天女に手を引かれ

閻魔にも和顔愛語を説き給い

目の限り菜の花の黄が師の浄土

波の音よき思い出を繰り返し

句の仏補陀落山に妻を詠み

大矢十郎さんを悼む

八月十五日

五十年毎年夾竹桃と蟬

富士山の藍に一礼してしまふ

睡蓮も輪廻転生の旅か

酒倉の佐川西町東町

しりとりの匠みのりとはじめけり

病妻に花買う晩年の明かり

父は古里をその子は国を捨て

あじさいの七変化して不垢不浄

老いらくに禊の恋もありぬべし

古稀の屠蘇生き死にもはやかそかごと

生きていることが運だと思う古稀

餅の罅わが皺の手に受けて食ふ

餅花を二歳の孫と咲かせおり

お前七草ここは平成のキッチン

花
徑

生身より句碑光るなり初日影

会い別れ恙無くあれ句碑と友

南天と写されてよい歳になり

あと一步あと一步よき言葉なり

大鳥の羽搏くやはや姿なし

風
四句

風神の袋から出た春の風

風博士ラムネの玉を鳴らしおり

風巻いて韋駄天となる独楽の夢

飽食の国へ来て風腐るなり

寂光西光子さんを悼むの胡蝶蘭とはなり給い

雲は巡礼菜の花の上曼珠沙華の上

墓碑銘を守るかたちに木を植える

酔い醒めのこれも汚職のダムの水

鉛筆の匂いは五十年同じ

蹈鞴踏む阿形吽形人間座

鱗雲一枚こぼれ亡母の窓

九月十月行き着く酒の十二月

鯉のぼり備前美作風播磨

風のまちにて薫風からと書くいのち

靄山へ三角波のほしいまま

市浦鯨御殿 二句

ラーメンに行者にんにくの名もよろし

算用師峠の杉と待つ木霊

みちのく松陰道

路郎の忌 三十年は一つ息

路郎忌の畏怖渴仰も齢をとり

師に会いし日の師の齡がわれに来る

胃薬を買う漱石の札の顔

ダイエットとてご先祖の飢餓の食

いつのほど背のびの背丈わが背丈

酒の甕 以後水ばかり入れられる

金米糖 孫あげるなりもらうなり

方舟の用意そろそろ社会党

元旦を白一色の千羽鶴

花御所を柿と知りしは玲瓏下

文机に花御所振れば鳴りそうに

初光ここに人間陶冶の詩

双六に七十で知る転び方

父だけは口を開けずに笑うなり

二代目の差がいつまでも残りそう

老師九十二 阪神淡路大震災 四句 夫人圧死せり

復旧は急土埃土埃

紋太素生竹二句沙弥の御霊しずか

震災の明日は我が身と思うなり

難波橋獅子像にはや春の雲

桜かてすかつと散ったわけでなし

わが過去に三日月型の亀裂あり

女人高野石楠花浄土塔浄土

室生寺

緋牡丹に負けぬ天晴れ孫娘

長谷寺

小説の路郎うたてし事実より

金輪際 変らぬ黒縁のめがね

石曾根民郎先生

掌で囲むほどの火も恋の巴里祭

平成の荒ぶる年の長刀鉾

あの髭は黒縄地獄からの使者

平成の補陀落渡海ムルロアへ

仏核実験

どこまでが首かと蛇も思案する

残念 残念 残念 村山さんの眉

蜆汁臍も九月に入りけり

もう覚悟出来たらしくて風呂へ行く

仰天の写楽の首絵友危篤

夕日も月も飴玉だった里の森

秋風の吾妻言問秋の橋

思い出をつついてうましどぜう鍋

七五三晴着きた手をつながせず

うかうかと来た七十の顔がこれ

新年や年を取るほど白い雪

岩風呂の岩のうしろはあの世かも

海潮温泉 四句

牛尾の湯 弟子はいつまで経っても弟子

宿の庭の雪溶けかかる椀の粥

朝粥へ在りし日の師のおちよほ口

老いらくに童心戻れ雛の前

割箸にこうも格式貧富の差

満月の万世橋に父の影

老酒へ水上勉強しずか

山の上ホテル新北京

いじらしや揃う百足の足見れば

孝行の重荷になるか古稀過ぎて

ふたつめの衛星がこれ男の児

長男に長男誕生 二句

でかしやんしたでかしやんしたと初対面

雲一つ風吹峠今越えて

悼 西口忠雄氏

萩椿咲け何事も元通り

罹災復興・恩人の新居落成

汚染水域乙旗挙げよ海の日

誰に似る誰にも似てず天使なり

孫宮参り

咆哮もあくびも見事虎のひげ

雲と征くあれは唐三彩の馬

嗚呼 櫻谷寿馬さん

襖絵に龍虎相撃ち春の雨

頬杖もつつかい棒よ秋の雨

クリスマス豚まんを買う雨の街

食べ初め匠とみのり 二句のビリケンさんの足の裏

まあおもらししてと三歳姉の顔

不退転スーチャーさんの髪の花

姉弟あけびに目鼻栗のおつむ

富士山の往きと復りに違いあり

源流に一筋の滝名も知らず

丸髻の母の写真が一つある

元旦の母なる川は朱金の帯

巡る忌や師は不死鳥と号されし

母さんは一か八かが大嫌い

手をつなぐことのかなわぬ雪だるま

肺炎へこの元旦の空のいろ

レントゲン寒冷前線通過中

雪風卷三十階の英国屋

三代の寝太郎揃う松の内

生きざまも縞馬のしま虎の縞

万愚節万民を愚に消費税

三十六塚さくらが咲いて桜塚

幻花一閃自転車は赤だったな

桃菖蒲めでたく育つ姉弟

証明書お辞儀の数をわびしがる

八月母の十七回忌

眼を閉じて見え眼を開けて見えぬ母

考える人なかなかの痩せ我慢

なんとなく河馬の母子もこどもの日

阿か吽か混濁の世に処する身は

協力はしますが彼の処世術

水濁り火も汚れ行く世紀末

嫁姑カーネーションは火の簇

羊羹を切るにもふたりばっちなり

古稀も生きてか孫の氣韻にさえ劣り

無口なる人でありしが今日の旅

うれしがることも老人めいてきた

卒寿翁淡淡として淡ならず

あじさいのふつくらさんとてんと虫

三歳の浴衣も処女ほうずき市

隠れ家は日暮里鶯谷あたり

誕生日マシマロ二つ掌に至福

見返りにたましいの秋しのび寄る

旅に出て迷いは深くなるばかり

稲妻に豎穴住居跡遺跡

母十七回忌
仏恋数珠持つことの多い年

親不孝者も七十一になり

秋ふたりまるで果物静物画

世紀末絵巻暗澹ダイアナ妃

杯を持つより志野が手に馴染む

昼の闇 青蓮院も知恩院も

捕らないでくださいと言う蛍狩り

戎橋恋も朝飯前のように

秋なれば酒買い仏パリーまで
百濟観音

勢い獅子赤青金の息を吐き
唐津くんち 三句

闇を来て珠取獅子は闇へ消え

鯢荒く鯛のあと追う うねりかな

寅年に候 寅の年の旦

箸紙もいの一 番は匠殿

四つの手が卍となりぬ 歡喜天

冬の酒 唐竹割りに胃へ落ちる

正月も梅より薔薇が似合 いだし

寒月に三々五々の通夜の客

旅人は焚火を借りて別れけり

大晦日老いはしずかに箱に居る

雪涅槃 悼 武原はん女 武原はん女舞いおさめ

この齢にぺんぺん草の風が見え

仏の座ここに好啓ここに藻介

つらら解け チップ Tip トップ Top タップ Tap ブ 珈琲館

鯉のぼり囿囿の身の置きどころ

なつかしや友七十の丈くらべ

今朝会うた南無帰依仏の白い蝶

来し方や合縁奇縁相半ば

温泉で卵のようになる女

おふくろが呼びにくるはずないんだが

養老の酒 年金で飲むべかり

しみじみと妻の長所がわが短所

四方拝 今年も旅の豊かなれ

三人は松竹梅よお正月

同期の桜

顚顚と鳩尾で聞くバイオリン

禪僧のたたずまいもて逝かれしか

悼 北川絢一朗氏

弟も鋏がもてるようになり

祝 五楽庵さんの古希

庵主古希百楽庵を目指しませ

孫の二人たこ焼きの前気を合わせ

誕生日ひとりひとときが至福

若者の海を歩けるような靴

末法の世に降る羅生門の雨

八月の花火 九月に曼珠沙華

あわててもあわてなくても熊の顔

しのび寄る秋が今年こは音を立て

芋の葉の露は仏舎利然とまるい

俊平に柩は狭しあわれ哉

悼 寺尾俊平さん

十三夜 俊平杉の子になった

除夜の鐘俊平星を磨いとる

もっと光をもっと 空気をお元日

おおらかに僕も初湯のジベタリアン

お年玉きったかたくちゃん待ってたホイ

湖に映すはオフェーリアか鶴か
悼 川上富湖さん

水平線一筋の沖仏岩

君は逝きありし日のまま茶房の絵

こがるるは父母よペルーのティティカカ湖よ

豆撒いて自分で拾う旅の果て

弥生待つ七つの孫の机かな

雛の酒湯呑みに注ぐは無法者

残念の幼な駆けずり回るかな

老いらくのこぼれこぼれて続く恋

蕩尽は金だけでないことを知る

雪見酒かの家持も招んでやれ

わが庭にわれと名付けし夢見台

嘴の形に鳥の生きるべし

髪白うならず年寄るのも寂し

廬山寺 四句

プラトニックラブいとおしや桔梗寺

半時を一声もなし桔梗寺

源氏には夕顔がいた桔梗寺

桔梗寺光源氏とかたつむり

待ちやすし かたすみという名の茶房

星が出て露天風呂にも沖がある

悼 林荒介兄

いっしんに昨日を明日にした男

革命さ はじめて コーラ 飲んだ日は

ローソンヘ グラン パパを ゲットして

合格は 大祖父さんの 出た 学舎

風見鶏の館 タツノオトシゴの家

のう三毛よ 盲導犬を見て 御覧

蟻たちよ 三三五五と 帰りなさい

流される雛よわたしもケア・ハウス

平成の埴輪マモルの宇宙服

来世紀もうにんげんの世ではなし

今日の暑も涼も天神祭かな

家康も上様領収証の僕も

羅漢さんには撫子を摘んできた

天下りしたばかりなるお元日

お元日戸締りをして飲みはじめ

老いらくの新年白い曼珠沙華

百人一首七十歳もお年頃

ふる里の水平線は志

砂時計目は耳よりもうたてけり

昼の酒恩師はいつまでも恩師

拾得の箒寒山一周忌

畏友寺尾俊平忌

新世紀葭のずいからのぞきけり

ベルリンを伯林と書き父恋し

新世紀汗をせぬ世がすぐに来る

みちのくの雪とりんごと黄なコート

宮城のお堀端行く黄なコート

御堂筋金の公孫樹へ黄なコート

聖堂のマリアに祈る黄なコート

屠蘇祝う酸素ボンベを傳かせ

リストラの見事な素首落としかも

席も変えない 酒も変えない

腕の無いヴィーナスの像と黄なコート

朱の社殿海の鳥居へ黄なコート

草千里馬上風追う黄なコート

顔見世の勘亭流へ黄なコート

陽炎へチーズの如し黄なコート

達人は喋り名人物言わず

天と地を君と往く大観覧車

握手して生き延びる血を貰いけり

心臓の手術魂抜かれるな

長男へ

ヒトゲノム金の盲者に酒の猛者

生真面目な戒名貰ろて君逝くか

嗚呼 高杉鬼遊さん

流鏑馬の矢ほど見事なものなし

のらくろを読み返しおり建国忌

光太郎 智恵子が来たら砂丘晴

一時間月の出飽かず見る波と

来た道を戻る思いに年を取り

母と児が母と娘になる写真帖

風薫る伽羅も麝香もしずかなり

息子から歳を聞かれた日を覚え

八月はまだ簡単な月でない

盛んなり秋鷺峰に雲もなし

友一人二人声出せ雲の果て

温泉にいて腕組みをしています

肩車したらはっきり他人の子

鱸の音は遙かはるかを目指す音

たてがみの白髪は父の反骨だ

呼ぶときと呼ばれるときの父の顔

人の世というは石にも表裏

鯖雲の裏を想像しています

北方四島夕餉の鉢をこう並べ

弟橘媛を恋せし日を覚え

飛ぶことを覚えた雛の黙りがち

鷺の飛ぶ爪の先まで隙が無し

老いらくに二月のシヨコラ甘すぎる

握手して猫ほど柔らかい手あり

水の音私が石に捨てられた

溢れる湯先ず爺が溶け孫が溶け

白湯の味喪のネクタイを解きながら

写経して不生不滅の風まとう

生々流転水より長き風の章

蚊が鳴いて僕を探しに来てくれた

風船と魂だけは赤がよい

人生は二幕三幕ほどがよい

肩車タンポポに風杉に風

先手打つおんな奥の手持つおとこ

象さんとお話出来た日の寝言

酒の壺花を挿されて恥ずかしい

野良でいておっとりとした見事な目

温泉で生まれたときの顔になる

母刀自の在せし頃の御御汁おみおつけ

老いらくに吉祥天のぬいぐるみ

師弟あり一人は天に一人地に

毒の世の達陀の火と闕伽の水

ムンクの絵外真つ青な雪景色

二月盡いのち盡へと続くなり

木杯へ男の月の花菖蒲

春の叙勲で木杯一組台付賜与さる 五句

薫風へ大内山の風の色

恩師かや豊明殿の雲に声

かしこさよ陛下と同じ目の高さ

文相の薔薇の微笑もしかと受け

遠山敦子文部科学大臣

路郎・葭乃両先生比翼句碑尾道に建つ 三句
ふる里へいのちが還る句碑一つ

句碑除幕先ず人情の除幕かな

師の背なを流さんばかり酒供養

腸閉塞検査入院

この齡で屁糞葛の仲間入り

いつまでも肚のくくれぬ役者かな

風薫る鯛美しく人やさし

五十年花径遙かに香爐峰

あとかき

吉田茂首相が長生きの秘訣を問われ、「人を喰っているからだ」と答えられたと聞き、イギリス仕込みのユーモアの見事な切れ味を認識致しましたが、その伝でいくと、私は「川柳を食べているお蔭で七十五歳までも長生き出来た」と言えそうです。

まして川柳生活四十六年、今年の春の叙勲で木杯一組台付を賜与されました。思いもかけぬことで、これは川柳塔社にとつても、先の西尾葉先生に続く慶事です。川柳界の組織の力、先輩の指導きと仲間のご支援が無ければ叶うことはありません。この喜びのお礼の意味で、私は川柳活動の集約的な句文集を編み、関係各位に贈呈することに致しました。先ずは上巻の句集成をお届け致します。

初心時代から書き散らした自選句の完全な収集もままならず、このようになりました。

しかしながら、今年は恩師麻生路郎・葭乃両先生の比翼塚を、先生の故里尾道市に建立する念願も達成出来、二重の喜びに浸っております。心からの感謝あるのみです。

このたびも沖積舎の沖山隆久社長のお力添えに負うところ大で、これも心からお礼を申し上げます。

平成十三年七月十一日

橘高 薫風

橘高薫風川柳句集

平成十三年九月二十日発行

著 者 橘高薫風

発行人 冲山隆久

発行所 株式会社冲積舎

東京都千代田区神田神保町一・五二郵便番号一〇一・〇〇五一

電話〇三・三三一九一・五八九一 振替〇〇二三〇・七一七七六三一

文昇堂十互恵印刷／松栄堂製本

ISBN4-8060-6591-9 C0392